



『奇跡の人 ヘレン・ケラー自伝』
新潮文庫
ヘレン・ケラー著 小倉慶郎訳
(新潮社 2004年)

“奇跡の人”とはだれか 『ヘレン・ケラー自伝』

評者

佐治 恵
(塾講師)

巨匠によって書かれ、無数の読者の吟味に耐えて読み継がれてきた作品を「古典」と呼ぶなら、ここに取り上げる『ヘレン・ケラー自伝』は古典の名にふさわしくないかもしれない。作者はまだ二十代前半の若い女性でこれまで著作経験は皆無である。

ただ、一つの条件が満たされればこの作を古典の列に加えることができるように思う。それはヘレンの個人的な（それも盲と聾という条件が与える特別な）経験が、それゆえに価値があり人を感動させるということではなく、むしろ全く逆に、それが万人に開かれた普遍的な経験であることによって、古典の名を得ることなのである。

* * *

先生と私は、井戸を覆うスイカズラの香りに誘われ、その方向へ小道を歩いて行つた。誰かが井戸水を汲んでいた。先生は、私の片手をとり水の噴出口の下に置いた。冷たい水がほとばしり、手に流れ落ちる。その間に、先生は私のもう片方の手に、最初はゆっくりと、それから素早く water 綴りを書いた。私はじっと立ちつく

し、その指の動きに全神経を傾けていた。すると突然、まるで忘れていたことをぼんやりと思い出したかのような感覚に襲われた——感激に打ち震えながら、頭の中が徐々にはつきりしていく。ことばの神秘の扉が開かれたのである。この時はじめて、WATERGATEが、私の手の上に流れ落ちる、このすてきな冷たいものことだとわかったのだ。この「生きていることば」のおかげで、私の魂は目覚め、光と希望と喜びを手にし、とうとう牢獄から解放されたのだ！

(小倉慶郎訳 新潮文庫)

本編中、最も知られた場面であろう。ヘレンは突然 WATERGATE を、いま、手に受けているこの水のことでと悟る。彼女は自分の身に起こったことを、どう説明してよいか分からない。ただ「忘れていたことをぼんやりと思い出したかのような感覚」と記すことしかできない。そんなつかみどころのない出来事であるのに、この場面を知った者はだれもが、なぜかこの出来事が忘れられないのだ。どうしてだろう。私はそれを上記のように「それが万人に開かれた普遍的な経験」であるからだと考えたい。

それは二人の師弟の絆が持つ普遍性なのだと長く考えられてきた。おそらく作者のヘレン自身もそう考えていた。だがそれでいいのだろうか。

* * *

この場面をクライマックスに据えた一九六二年の映画が、アーサー・ペン監督の『The Miracle Worker』(日本語題は『奇跡の人』)である。サリバン役で出演したアン・バンククロフトはアカデミー主演女優賞、ヘレン役のパティ・デュークも同助演女優賞を受賞している。まるであの「師弟の絆」がそのままハリウッドの評価につながったかのように。冒頭、真っ白なシーツが庭いっぱいに干された間をまさぐるように歩むヘレンの姿は、白黒画面ならではの美しい映像である。あたかもその場面は、無垢なヘレンを象徴するかのようで純粹に美しい。だがこうも考えられる。この無垢の白さは、ヘレンの内面がまだ空虚な白紙状態であることを意味するのだと。まだ何も書き込まれていない白紙(タブラ・ラサ)としてのヘレン。そこに物語を書き込みに来

るのがサリバンのというわけだ。

自身、弱視の障がいを持ち、病弱な弟とともに孤児院で（おそらく体罰を含む劣悪な環境で）育ったサリバンの、弟の不幸な死の記憶を抱えたまま、単身、見知らぬ南部の土地に乗り込んでくる。アン・バンククロフトの演技と相まって、観る者は始めからサリバンの内面に溢れる物語に満たされる。無垢で白紙のヘレンに対し、数々の経験を積み込んだサリバンの働きかける。サリバンの献身の日々が始まる。

* * *

映画を見てなお、私は「奇跡の人」とはヘレン・ケラーその人のことだと思っていた。だが原題は『the Miracle Worker』である。「奇跡の働き手」「奇跡を起こす人」ということなら、これはサリバンのことではなければならない。アン・バンククロフトが主演でバティ・デュークが助演なのだ。映画のコンセプトは明確である。わがままを許さず生活の規律をどこまでも求めるサリバンの厳しい姿勢は、ついにヘレンの両親との衝突に至る。障がいを理由にしつ

けに妥協したらこの子に自立はない。職を賭して雇い主に主張するこのサリバンの姿は、半世紀前の（たぶん今も）アメリカ人の理想の自画像に近いものだったろう。「師弟の絆」に加えて「自立する者」。こうして映画・舞台の『奇跡の人』はヘレン・ケラーの物語を神話にまで高めたのである。

半世紀後の聴衆である私は、前述の冒頭場面などに引き入れられて観ながらも、しだいに違和感を募らせていた。ヘレンのかんしゃく、それを許さないサリバンの力づく。テーブルをたたいて反抗するヘレンとこれに厳しく対処するサリバンの両親らの大声。控えめに言ってもかなりにぎやかな場面が続く。

映画は音と光の芸術だ。サリバンの格闘を描くには好都合であろう。ところでヘレンの世界は？音もなく、色もないその世界はどう描かれていたのだろうか。画面からそれを感じることはできなかった。端的に言って、このアカデミー賞映画はヘレン・ケラーその人をすくい取ってはいなかったのだ。

そもそもヘレンは何を感受しているのか。手掛かりは彼女自身による自伝にあり、そこから何を読み

取るか、私たちの想像力にかかっているはずである。

* * *

目が見えず、耳が聞こえない子にとつて、どんなに母親の存在が大きいか。おそらくヘレンにおいて母親と自分が一つになっている。二人がくっついて離れない、というのとは違う。もともとどこから母親でどこから自己かという区別（分節）が成り立っていないのだ。教育とは分別を与えること、それがサリバンの信念であった。ボタンをかけるとカナイフとフォークを持つといった次元から始まって、しだいに言葉による世界の分節を獲得する方へと進むカリキュラムが立てられていたようである。

サリバンは人形を二つ与えて、両者は違うものだが共通の性質を持つものであることに気づかせ、そこから Doll という言葉に到達させようとし、またマグカップに水を入れて、容器の Mug と中身の Water を別の言葉として分かせようとした。

ある日、新しい人形で遊んでいると、サリバン先生は、

別の布製の大きな人形を私のひざに置き、Doll と綴った。どちらも Doll なのだ、わからせようとしたのだ。その前に、私と先生は Doll と Mug という二つの単語をめくり、けんかをしたところだった。先生は Doll は「マグカップ」であり、Mug は「水」を指すということを理解させたかったがうまくいかない。私はどうしてもこの二つの単語の区別がつかなかった。先生はあきらめて、このことから離れるようにしたが、それでもすぐに、同じ問題を持ち出してくる。同じことの繰り返しにがまんできなくなった私は、人形をつかみ、床の上に思いきり投げつけた。

分節なきヘレンの世界では、すべてが連続体をなしているだろう。自己と他者の別はなく、母や父やサリバンといった存在がその都度何らかの気分を点滅させる。目と耳に頼れない分、鋭敏にされた感覚のもたらす柔らかさや硬さ、温かさや冷たさ、匂いの濃淡、甘さや辛さ、さらには空気の温度や湿度の変化といった、分節以前の度（度合）の連続がヘレンを形成する。その計り知れない度の世界を、私た

ちはどこまで追跡できているのだろうか。それを「白紙」だと言つて許されるのだろうか。

* * *

ヘレンにとつてマグカップと水は一体をなすものであつたし、おそらくカップを取る手とカップの把手の間には柔らかさや冷たさや潤いの予感などが感知されていたはずだ。二つの人形を別の物でありながら同一のカテゴリに類別する作業など、ヘレンの現実からはかけ離れた実験のように見える。とうとうかんしゃくを起こしたヘレンは人形を床にたたきつけて壊してしまふ。先の引用に続く部分。

人形が砕け散り、破片が足元に散らばつたのがわかると、喜びが込み上げてきた。この激しい怒りのあとには、悲しみも後悔も湧いてこなかつた。人形を愛していなかったからだ。私が住む音と光のない世界には、悲しみや後悔などという胸をつく思いも愛情もなかつたのである。サリバン先生がほうきをもつて、暖炉の片側へ人形のかげらを掃き集めているのがわかると、不快のもとが

消えてせいせいし、うれしくなつた。先生が帽子を持つてきた。外で暖かい日差しを浴びよう、というのだ。そう考えると——ことばのない感情を「考え」と呼べるのなら——うれしくて小躍りした。

この人形はサリバンの（手作りだつただろう）プレゼントだつた。サリバンのヘレンへの気持ちが込められた人形である。情け容赦なく壊したことを、後年のヘレンは（自分は）人形を愛していなかった」と記す。しかしむろんそれは、サリバン先生など愛していなかったという意味であるに相違ない。

たたかうサリバンの体勢が一瞬ゆらぐ。自分の存在を否定されたのである。片時も教師としての構えを崩さずに来たサリバンが、いま途方に暮れ、ただ人形のかげらを掃き集めることしかできない。綿密に考慮されたカリキュラムは消えてしまつた。次にどうする予定だつたのか、何をしたらよいのか。そうだが、とりあえずこの子の気持ちをしずめよう。ここから冒頭に引用した井戸への歩み行きの場面になる。帽子をかぶらせて外に出ると、米国南部の広い屋

敷の庭は初夏の生気に溢れていた。サリバンとヘレンは並んでこの庭を下って行く。今や、教師と生徒ではなく取り立てて目的なく歩く二人である。ヘレンにとって、初めて厳格な教師サリバンの圧迫から解放されたときだったと言つてもよい。サリバンの無力とヘレンの自由が交錯する。「水」がヘレンに解き放たれる瞬間は、このとき訪れたのである。

* * *

いったい「奇跡の人」とはだれのことなのだろう。初めの疑問に立ち返りたい。サリバンが奇跡を起こしたのではなかった。むしろサリバンが身を引いたときに出来事が起こったのだ。だとすれば、改めて「奇跡の人」の名はヘレン・ケラーその人に返してやるべきだろうか。ヘレンこそ奇跡の当事者なのだから。いや待て、サリバンもまた、そしてサリバンこそ、驚異の思いでこの出来事がヘレンを襲っているこの瞬間に立ち会っているのだ。サリバンはすでに教師・教育者としての身体を剥奪された。今、ヘレンとともにゆっくり何の計画もなく庭を下るサリ

バンの身体は、ヘレンが行こうとする方向をいっしょに辿る、随したがって行く身体である。それを「教師の身体」に対して「保育者の身体」と呼びたい。そして保育者である限り、サリバンもまたこの奇跡の当事者（単なる目撃者ではなく）となり得たのである。そうとすれば「奇跡の人」はヘレンであると同時に、自分の計画の挫折を通じてこのことが起こることを知ったサリバンでもあると言つてよいだろう。

いやさらに言うべきか。奇跡を起こしたのは「水」そのものであった。サリバンの、自立へと教え導く教師の身体とは違う仕方ではヘレンの身体を目覚めさせたのは、いわば「水」そのものの力であった。マグカップと区別（分節）されるものとして水があると教えるのではなく、ただ「水」としてこのものがあることを告知したのは「水」自身でしかなかった。この偉大な「奇跡の人」を自然（ピュシス）と呼びたい。

ピュシスとの出会いは普遍的な経験である。だが自然ピュシスは人為ノモスが無力になったときにだけ現れる。普遍的であるとはまさにそのことではないだろうか。